

共同研究プロジェクト

多様化する学生と大学英語教育

2016年度活動報告

陸 君・中窪 靖

1) はじめに

昨年度に3年間という一つの区切りをつけた本研究も、新たに平成28年度にさらに1年の研究期間を追加した。

調査対象は、基本これまでの3年間と変わらない。各学部・各学年ごとに、上位・中位・下位のクラスをその対象とした。また、その対象としたソフトも、春学期は「英文法コース」、秋学期は「PowerWords コース プラス」である。

春学期は、これまでの流れを踏襲し、対象となる全クラスで、受講生にはこまめに日常の学習を促すように呼びかけた。その結果、例年のような傾向が見られた。例えば、2年次の〈下位クラス〉では学習をたとえとぎれとぎれでも続けることができた学生は16%から25%にとどまった。一方で、とりわけ担当者が定期的な学習の継続を訴えかえることが功を奏して、また、その対象が〈上位クラス〉であればそれが追い風となって、ほとんどの受講生が目標の数値を達成した。

現在、秋学期が始まりほぼ3分の2の授業を消化している。この時点で、14時間の課題をおえている受講生は以下の通りである。下位クラスは0名（1名のみだが7時間を終えている受講生はいる）。中位クラスは4名（さらに半分の7時間に到達しているものが3名）である。上位クラスは6名（半分の7時間に到達しているものが18名）である。

これまでのデータと同様に、クラスのレベルと課題をこなすためのモチベーションとが見事に比例している。

2) この1年の活動と成果

ALC NetAcademy 2 の受講生への課題は、過去2年と同様に、春学期に「英文法コース」を秋学期に「PowerWords コース プラス」をその課題とした。受講生の学習動向はほぼ決まってきた感がある。学習を課題とするクラスの中では、上位と中位クラスは担当教員の指示の度合いによって学習の取り組みに差がでるものの、概ね要求された課題に対応する受講生が25%から50%の割合で存在した。その反面、下位クラスは15%に満たない。

今年は奇しくも、二つの実験的な試みをするようになった。2年次生の中位クラスにおいて、学習開始から2カ月間を特に学習を促すことをしなかった。2つあるクラスのうち一方のクラスは、23%（18名中4名）が目標値の半分を超えたにすぎず、もう一方はさらに少なく10%（25名中2名）にすぎなかった。一方で、1年次生の下位クラスにおいては、一つのクラスでコミュニケーションの担当教員とリーディングの担当教員が共にプロジェクトを担当する教員であったため、二人が受講生に学習を促す言葉をかけ続けた。その結果、このグループは下位にも関わらず、2つあるクラスのうち一方のクラスでは既に目標値の半分を超えた受講生が36%に達している。そしてもう一方も、19%の受講生が目標値の半分を超えている。

過去3年間に於いては、2度国際学会のポスターセッションに参加した。そして昨年、3年間の研究期間を終えるに当たってその総括をした。そして、今年新たに4年目へと新たな研究期間が始まったわけであるが、受講生の状況に大きな変化は見られない。

プレイメントテストに成績が下位のグルー

ブでは、日常の学習習慣がないということから授業の予習も覚束ない中で、授業に加えてコンピューター課題をこなす余裕はない。中位グループに於いては、今学期（秋学期）の方策として、敢えて受講生の学習を促すことをせず2カ月間の様子を見た。1時間以上の学習履歴を残すものは17名と全受講生の36%に過ぎなかったが、その内4名は課題の14時間に届く勢いを見せ、うち一人は18時間の学習を終えている。上位グループでさえ、担当教員が強く学習を促すことをしなければ、一方のクラスが50%を超えているにもかかわらず、もう一方は31%にやっと届くという風に学習をなおざりにするケースが見られる。

3) まとめとして

本学が導入しているコンピューターソフト（ALC NetAcademy 2）を用いて、学生の英語学習のモチベーションと学習の効果とを約4年に渡り調査してきた。コンスタントに学習することでより大きな効果を得るという前提で学生の学習を促すことを続けてきたが、これは必ずしもうまくいかない。毎日少しずつ学習を進めることのできる受講生がいる一方で、学期末

に集中的に学習を進めて既定の時間数を稼ぐ受講生がいる。こうした2つのカテゴリーに属する受講生は課題を達成しているので問題はないとしても、さらなる問題となる受講生がいる。それは全く学習を進めることができないタイプの受講生である。これは、授業に出席できない学生との連動があるのかもしれない。

今年度、試みに再履修クラスの卒業年次生にこのコンピューター課題を課した。90分の学習で1回の欠席を補うことができるという条件を提示したが、学習をしたのは全8名中皆無に等しかった。

ALC NetAcademy 2を研究の対象としてデータ収集を始めたことには、別な意図があった。授業の出席がままならず再履修クラスとなる学生をターゲットにしたのである。いわゆる「引きこもり状態」にある学生に単位修得をさせるための一つの手立てになるのではとの期待があった。しかしながら、もともと教室に来ることができない学生の大半は、如何なる手立てを施しても学習に取り組むことは不可能であるとの結論を下さざるを得ない。